頓阿、その和歌表現の精選

― 日次家集から草庵集・続草庵集へ ―

藏　中　さ や か

Careful Selection of the *Waka* Expression by *Tona*: Remarkable Changes in *Souan-shu* and *Zoku-souan-shu* as Compared with *Tona's Hinami-kasyu*.

KURANAKA Sayaka

Abstract

I have clarified the *Waka* historic values in a new document, *Tona's Hinami-kasyu*, by describing its whole manuscript in a transcription of *Tona's Hinami-kasyu (the first half year of 1346)*, owned by Yōmei Bunko (Kobe College Studies Vol. 59 No. 1 2012), and by introducing the contents and composition in an examination of *Tona's Hinami-kasyu (the first half year of 1346)* owned by Yōmei Bunko (*Waka-bungaku-kennkyu* Vol. 105 2012). Based on those articles, in this study, I mainly investigated what changes *Tona* made for the *Waka* part when he edited his own *Waka* for *Souan-shu* and *Zoku-souan-shu*. Notably, *Tona* edited those works from *Tona's Hinami-kasyu*, in which he temporarily collected his work. After perceiving the whole common *Waka*, I indicated the points where *Tona* himself made changes, and then discussed the expression effects.

キーワード：中世文学、和歌文学、頓阿、家集
Key words: Medieval literature, *waka* literature, *Tona*, the collected poems

本学文学部総合文化学科教授
連絡先：藏中さやか　〒662-8505　西宮市岡田山4-1 神戸女学院大学文学部総合文化学科
kuranaka@mail.kobe-c.ac.jp

頓阿、その和歌表現の精選 ―日次家集から草庵集・続草庵集へ―

藏中さやか

はじめに

稿者は、「陽明文庫蔵　頓阿日次家集（零本、貞和二年前半部分）翻刻」（『神戸女学院大学論集』第五九巻第一号　二〇一二年六月）で、新出資料である頓阿日次家集の本文を全文紹介し、「頓阿日次家集（陽明文庫蔵）の検討」（『和歌文学研究』第百五号　二〇一二年一二月、以下の本稿では前稿と称する）で、その内容・構成や本文上の問題点を取り上げ、頓阿日次家集の資料的価値を明確にした。

本稿では、これらを踏まえ、日次家集と草庵集・続草庵集との共通歌を比較し、第一段階として詠作を書き留めた日次家集と編纂意識をもってまとめた草庵集や続草庵集とではどのような違いが見受けられるのかを示し、特に和歌表現を精選し、本文改変をおこなったと考えられる部分を中心に検討していきたい。

既に前稿では、日次家集115・123の場合をそれぞれ取り上げ、115からは日次家集の表記が古態を留める伝本と共通するものであることを指摘し、123からは本文改変の過程を考察した。また和歌本文に傍書のある歌（89・92・103・104・141）についても指摘をおこなった。稲田利徳氏は、頓阿が「大幅な改作はおこなわなかった」歌人であると述べている[1]が、一次資料たる日次家集の出現により、詠作当初の和歌表現が確定し、草庵集や続草庵集との異同を具体的に吟味することが可能になった。本稿では全共通歌を把握した上で、頓阿自身による改変と考えられる箇所をあぶり出し、その表現効果についても考察を加える。

尚、詞書部分については既に前稿において、同じ和歌であっても日次家集と草庵集では詠作の場が異なっている場合があること、日次家集の一時的な書き留めの形式が草庵集では整った形式に改められていること等を指摘した。詠作機会をどのように書き記すのか、という問題は、草庵集の編纂姿勢に関わることであり、和歌表現の精選とはやや論点が異なる。また日次家集に記される和歌本文の改変時点が、別機会に出詠する時であったにせよ、草庵集編纂の際であったにせよ、表現を磨いたという点では変わりはない。よって本稿では詞書部分の異同については指摘に留め、主たる対象を和歌本文に絞り論述を進めていくこととする。

以下の本稿では、草庵集、続草庵集ともCD－ROM版新編私家集大成により、頓阿法師詠は『頓阿法師詠と研究』（未刊国文資料〈第三期　第九冊〉一九六六年）に、その他の歌集はCD－ROM版新編国歌大観

によるものとする。本文中では日次家集歌番号のみ算用数字を使用する。

日次家集と草庵集、続草庵との共通歌は三六首ある。これに新千載集撰集資料として草庵集成立以前に自撰した頓阿法師詠（他人の作七首を除き、計三六八首、うち三六一首が草庵集と、一首が続草庵集と一致）も加えると、左の表の通りになる。

共通歌三六首は、草庵集とのみ共通するもの二三首、草庵集・頓阿法師詠双方と共通するもの九首、続草庵集とのみ共通するもの四首になる。

さらにこれらの本文を上段に日次家集、下段に草庵集、続草庵集、頓阿法師詠を配する形で一覧すると、次頁以降のようになる。一覧中には日次家集に記される詠作機会ごとに【　】を付けたアルファベットを付し、その下に、詞書に異同のあるものは《詞》、和歌本文に異同のあるものは《歌》を記した。網掛け部分は和歌本文の異同箇所を表す。以下、この一覧に基づいて論述を進める。

日次家集 全167首	草庵集 1443首	頓阿法師詠 368首	続草庵集 660首
7	10		
11	627		
18	11		
23	176		
30	802		
35	1400		
36	1359		
39	1358		
48	860	245	
54	589		
56	1000	272	
57	1428		
58	223		
66	1070	294	
70	272	77	
74	268	76	
82			90
83			116
89	460	128	
91	893		
92	1241		
99	396		
100	942		
104	412		
105	1268		
107	168		
111	665		
112	1020	279	
114	1231		
115	1290		
122			178
123	504	144	
128	238		
130	401		
141	969	265	
149			73
	計32首	計 9 首	計 4 首

日次家集と草庵集・続草庵集（私家集大成）及び頓阿法師詠（『頓阿法師詠と研究』）共通歌一覧

日次家集

【A】《詞》《歌》

（十二日中条備前守秀長会三十首に）雪中鶯

7 ふる雪のあしたの原にきゆるなり春をたとらぬ鶯のこゑ

【B】

（當座三十首に）里擣衣

11 あれ残る里をしらせてみなせ山ふもとのきりに衣うつ也

【C】《詞》《歌》

廿八日梶井宮月次御會三首、雪中鶯

18 はれやらぬ雪には春もしらしとやけさ鶯のなきてゆ□らん

【D】《詞》

（當座三十首に）谷花

23 たちならふ花のさかりや谷かけにふりぬる松も人にしられん

【E】《詞》《歌》

（廿日性阿上人坊の當座百首に）林雪

30 冬かれの雲のはやしにふる雪ははなの所といまもみ□つゝ

草庵集・続草庵集（続）・頓阿法師詠（詠）

〈新編国歌大観本、和歌文学大系本との異同は一部のみ掲出〉

等持院贈左大臣家二首、雪中鶯

10 ふる雪の朝の原にきこゆなり春をたとらぬうくひすの声

（里擣衣）

627 荒のこる里を知せてみなせ山ふもとの霧に衣うつなり

おなし心を（等持院贈左大臣家二首、雪中鶯）

11 消やらぬ雪には春もしらしとや今朝うくひすの鳴てつくらん

消―はれ新編国歌大観

闕伽井宮にて、古渓花を

176 立ならふ花のさかりや谷陰にふりぬる松も人にしられん

不断光寺にて、林雪を

802 冬かれの雲のはやしにふる雪は花のところと今もみえつゝ

賀茂

35そのかみもいくよになりぬ神山のふもとにちかきかものみつかき

尺迦

36よにいて、月のみかほのてらすかなこれやむかしの雪の山人

大日

39ものことにあまねくてらすことはりやはしめていてぬひかりなるらん

神祇の歌中に

1400そのかみもいく代になりぬ神山のふもとにちかき賀茂の水かき

釈迦

1359世にいて、月の御かほのてらすかなこれやむかしの雪のやま人

世に―世を和歌文学大系

大日を

1358物ことにあまねくて○すことはりやはしめて出ぬ日影なるらん

【F】《詞》《歌》

（廿五日中条備前守聖廟法楽十首）寄山恋

48雲かゝるふしのたかねにたつけふりかくれはつへきわか思ひかは

長秀月次五首に、寄山恋

860雲かゝるふしのたかねにたつけふりかくれはつへき身のおもひかは

寄山恋

詠

245雲かゝるふしのたかねにたつけふりかくれはつへき身の思ひかは

【G】《詞》

（廿七日花町弾正親王家御會三十首に）惜月

54いるかたのみねのこのまをもる月そ心つくしのかきりなりける

別恋

56なきぬれとわかれもやらてとりのねのきこえぬまてにあくるよはかな

弾正尹親王家五首、暁月

589いるかたの峯の木のまをもる月そ心つくしのかきり成ける

弾正親王家五首、別恋

1000なきぬれとわかれもやらて鳥の音のきこえぬまてにあくる夜は哉

弾正親王家にて別恋

詠

272なきぬれとわかれもやらて鳥のねのきこえぬまてにあくるよはかな

【H】

廿九日青蓮院入道二品親王家に、住吉、玉津嶋を繪にあらはして哥講せられ侍しに、花契多春

青蓮院二品法親王家、花契多春といふ事を講せられし

57色かへぬそのふの竹をいくちよの友とか花もちきりをくらん

【I】《詞》

同夜聖護院法親王家御会三首、残花

58なへてよにちりぬる比は山さくらまかはて残る雲かとそ見る

【J】《詞》《歌》

（當座五十首に）稀恋

66こひしなておなしつらさをなけゝとやわすれはてゝは思いつらん

【K】《詞》

（十三日将軍家三首）待郭公

70月よりも山のあなたやおしむらんふけてもいてぬ時鳥哉

【L】《詞》《歌》

（廿五日中条備前守北野法楽十首）待郭公

74なれをしそつらしとはおもふ郭公まつをならひにとしのへぬれは

1428色かへぬそのふの竹をいく千代の友とか花もちきりをくらん

花―君新編国歌大観

聖護院入道親王家三首、山残花

223なへてよにちりぬる比は山さくらまかはてのこる雲かとそみる

聖護院宮にて、稀逢恋

1070いきて世におなしつらさをなけゝとやわすれては又思ひ出らん

稀逢恋（樋口本傍書）

詠

294いきてよにおなしつらさをなけく（恋ヒナテ）とやわすれはてゝは思ひいつらん（なけゝ（樋口本））

等持院贈左大臣家月次三首に、夜時鳥

272月よりも山のあなたや惜らん更てもいてぬほとゝきすかな

将軍家三首に

詠

77月よりも山のあなたやおしむらんふけてもいてぬ郭公かな

弾正尹親王家五十首、時鳥

268なれをしそつらしとはおもふ時鳥待をならひに年のへぬれは

弾正親王家五十首に郭公

詠

76なれをしそつらしとは思ふほとゝきすまつにつれなきとしのへぬれは

【M】《詞》《歌》

廿九日梶井宮月次御会三首、庭落花

82木すゑよりさそふにあかてさくら花ちりしく庭に春風そふく

池上藤

83ふちの花うつろふかけは池水のそこより浪のたつかとそみる

【N】《詞》《歌》

（家頼かもとに哥よむ所にまかりあひて）萩

89いまはよにもとの心のともゝなしおいてふるえの秋はきの花

寄玉恋

91玉のをのとくる心もみえなくにわれのみなとか思みたるゝ

述懐

92しはしたに身をゝく山のあらましをおいの心に猶いそくかな

【O】《詞》

（十三日将軍家月次三首）納涼

99なくせみのこゑもひとつにひゝきゝて松かけすゝし山の瀧つ瀬

隔恋

100こかれてもかひこそなけれみくまのゝうらよりおちのおきのつり舟

梶井二品親王家三首に、庭落花　　庭落花―落花新編国歌大観

続90こすゑよりさそふにあかて桜花ちりしく庭もあらし吹なり　　庭も―庭に新編国歌大観

（おなし心（藤花）を）

続116藤の花うつろふ影は池水のそこより浪のたつかとそ見る

人の千首の歌よみ侍し所にて、萩

460いまは世にもとのこゝろの友もなし老てふる枝の秋萩の花

萩

詠128今はよにもとのこゝろの友もなしおいてふるえのあきはきの花

恋歌の中に

893玉のおのとくる心もみえなくに我のみなとかおもひみたるゝ

述懐歌あまたよみ侍し中に

1241しはしたに身ををく山のかくれ家をおひの心に猶いそくかな

贈左大臣家三首

396なくせみの声もひとつにひゝきゝて松かけすゝし山の滝つせ　　かけ―風和歌文学大系

隔恋

942こかれてもかひこそなけれみくまのゝ浦よりをちの興のつり舟

【P】《詞》

（同夜庚申細河陸奥守三十首に）夏祓

104 みそきしてあさの葉なかすかはのせに井せきの水に夏もとまらす

旅行

105 あつまちそおもへはとをきふしのねのふもとにきてもひかすへにけり

陸奥守顕氏朝臣家にて、六月祓

412 御祓してあさのはなかす河のせにゐせきの水に夏もとまらす

せに―瀬の新編国歌大観

陸奥守頼氏家にて、旅行を

頼―顕和歌文学大系

1268 東路そおもへはとをきふしの根のふもとにきても日数へにけり

【Q】《詞》《歌》

（廿五日中条備前守月次十首）折花

107 いと、猶かしらのゆきの色そへて花のかさしは老もかくれす

初冬時雨

111 冬きぬとたれにつけてか神無月さとわくけさのしくれなるらん

寄風恋

112 ゆく舟のやへのしほかせ一かたにたのめはやかてかはる中かな

名所鶴

114 あはれともきく人あらはわかのうらのあしへのたつにねをやそへまし

旅宿

115 草まくらおもふことゝてふるさとの一夜ゆめにみえぬまそなき

兵庫以頭長秀家にて、花の歌よみ侍しに

168 いと、猶かしらの雪の色そへて花のかさしは老もかくれす

二条大納言家三首、初冬時雨

665 冬きぬとたれにつけてか神無月さとわく今朝の時雨なるらん

おなし家（御子左大納言家）百首に

1020 行舟は八重の塩かせ一かたにたのめはやかてかはる中かな

四季に百首哥ナシ（猪口本）よませられしに

詠

279 行舟のやへのしほ風ひとかたにたのめはやかてかはる中かな

贈左大臣家五首に、述懐

1231 あはれともきく人あらはわかのうらのあし辺のたつにねをやそへまし

旅宿夢

1290 草枕おもふことをとて古郷のたひねの夢にみえぬ夜そなき

【R】

（将軍家七夕七首）

122 まれに来てうらみなからやたなはたのあまのは衣たちかへるらん

続

178 まれに来て恨なからやたなはたのあまのは衣立かへるらん

等持院贈左大臣家七夕七首歌に

【S】《詞》《歌》

十七日慶運法師月次三首、草花露

123 はぎのうへの露となりてや雲井とふかりのなみたも色にいつらん

法印慶運よませ侍し三首に、草花露

504 萩の上の露となりてや雲ゐとふ雁の涙も色にいつらん

萩―萩新編国歌大観
にいつ―かはる新編国歌大観

法印慶運よませ侍し三首に初鴈

詠 144 萩のうへの露となりてや雲井とふかりのなみたも色かはるらん

【T】《詞》

（三日左大臣家續百首に）藤

128 あらしふく松にさかすは藤の花をとせぬなみのたつとみてまし

納涼

130 をく露の残るもす、しうつせみの葉山にはる、村雨のそら

松上藤

238 あらしふく松にさかすは藤の花をとせぬ波の立とみてまし

等持院贈左大納言家にて、夏雨

401 をく露の残るも涼しうつ蝉のは山にはる、むら雨の空

【U】《詞》

（當座五十首に）寄雨恋

141 ふるあめにさはらぬまてはかたくともはれまをたのむ契ともかな

（法印慶運許にて歌よみ侍しに、寄雨恋）

969 ふる雨にさはらぬまてはかたくとも晴間をたのむちきりとも哉

寄雨恋

詠 265 ふる雨にさはらぬまてはかたくともはれまをたのむ契ともかな

【V】

（西林院二品親王家續千首に）里花

149 さくらさくさとをはかれすたつねきてまつとしもなきあるしをそとふ

西林寺二品親王家千首に、里花

続 73 さくらさく里をはかれす尋きてまつとしもなきあるしをそとふ

一

まず、日次家集の歌のうち、草庵集・頓阿法師詠双方と共通する九首について、検討する。

「はじめに」で取り上げたように、123で歌句改変が行われたことは前稿に既述した通りである。同じような異同の問題が見て取れるのが48・66・74の場合である。

48は日次家集のみ異なり、草庵集と頓阿法師詠が一致している。詠作機会に異同があるが、歌題は同じ「寄山恋」題である。結句「わか」が「身の」に改められているが、これは字形類似による誤写といった書写上の問題ではなく、推敲して改作したものであろう。富士山の煙は、新古今集雑中の慈円歌

題しらず

一六一四世の中を心たかくもいとふかなふじの煙を身のおもひにて

や、寛喜四年日吉社撰歌合の為家歌

六〇富士のねの雪まのけぶりよとともにけつかたもなき身のおもひかな

のように「身のおもひ」と合わせ詠む例もあるが、新勅撰集恋二の

（題しらず）　九条右大臣

七二八ふじのねに煙たえずとききしかどわがおもひにはたちおくれけり

や続古今集雑上の

題不知　土御門院御歌

一四九二かすみにもふじのけぶりはまがひけりにたるものなきわがおもひかな

のように「わがおもひ」とも詠じられ、当該歌の場合もどちらでも歌意は通る。強いていえば、「身」という語で「身体」という実体を想起させる表現の方が、雲と煙がかかる富士山に恋のおも「ひ」（火）を内包する我が身をなぞらえる意が鮮明になり、山と自身とがより重層的にとらえられ視覚的なイメージがわき起こる表現となっていよう。

【J】聖護院法親王家御会三首の当座五十首が詠作機会となる66は、歌題の「逢」の有無の他、初・三・四句に異同がある。うち三句の異同については、書写上の問題である可能性が高く、また四句についても草庵集のとる「わすれては又」は「わすれはてゝは」からの誤記として生じたものかとも考えられる。しかし、初句「こひしなて」は「いきてよに」に改められたものであろう。当該歌の類歌には「御子左大納言家十首、稀恋」という詞書の草庵集歌

一〇一九恋しなぬほととやさすか年月のつもりはてゝはおもひ出らんが

ある。「いきてよに」という表現は、万代集の

女につかはしける　九条右大臣

二五三〇うきにおふるあしのねにのみなかれつついきてよにふるここちこそせね

にあるように、この世に生きながらえるの意で、初句を「いきてよに」とする恋歌の初出例は続古今集（一三四一）である。「いきてよに」は、恋死にしないで、という婉曲的な表現よりも強い表現で、歌意は、すっかり忘れたかと思えばまた思い出す相手のせいで、恋死にもせず、この

世に生きて恋の辛さを嘆き続けよというのでしょうか、となる。稀の逢瀬故に死ぬに死ねないという心境を詠んだ歌である。尚、頓阿法師詠の樋口本は現在所在不明とのことであるが、傍書のある本として紹介されているものである。当該歌では日次家集のとる「恋シナテ」を傍書として留めており、日次家集段階の本文の痕跡を残していることになる。

74は詠作機会が日次家集と草庵集・頓阿法師詠とでは異なり、また歌題には「待」の有無という異同がある。或いは、日次家集の詞書に記す「中条備前守北野法楽十首」の際の歌が、邦省親王家での五十首歌に転用されたものであるのかもしれない。和歌は四句の表現が異なっており、日次家集・草庵集「まつをならひに」、頓阿法師詠「まつにつれなき」となっている。「まつをならひに」の他例は次の続草庵集の一例のみで、頓阿の独自表現である。

待郭公

一二七年毎に待つを習ひになしはてて初音いそがぬ郭公かな

74の本歌は、遠島御歌合十九番左の基家の

三七なれをしぞあはれとはおもふ時鳥あかず過ぎても歳のへぬれば

である。[2] ほととぎすを「あはれ」と歌う基家歌に対し、「つらし」と言い換え、それに合わせて四句の表現も意を尽くして言い換えたのが頓阿の作であろう。郭公を恋人になずらえて恨みを述べる体で詠じる当該歌の場合、待つことを慣例として長年過ごしてきたので、と自身が待つ長さを強調して詠じたものと考えられる。こちらの方が日次家集のとる歌題「待郭公」にも適っていよう。「まつにつれなき」という表現は「つれなく」が上句の「つらし」と類似する語であり、待っても（郭公が）素っ気ないそぶりで年が経過してきたので、という意になり、待つことよりもほととぎすの冷淡さに歌意の中心が移ってしまう。

日次家集と草庵集の表現が一致している点は、日次家集→頓阿法師詠→草庵集という成立順にそって考えれば、推敲の結果、草庵集で元々の表現であった「まつをならひに」に戻ったことになる。結論は詳細な諸本研究の成果報告をも合わせ見た上で導き出す必要があろう。尚、頓阿法師詠と草庵集では詠作機会に異同がない。

以上の三首が和歌本文中に取り上げるべき異同を含む場合である。以下、詞書の異同等についても略述しておく。

112は、初句の助詞「の」と「は」の異同は問題にならないものの詞書が三様になっている。112の含まれる【Ⓒ】は六月廿五日に開催された「中条備前守月次十首」という歌会での作として日次家集に所収される。十首の歌群で、四季と恋・雑で構成される歌題に対して詠じられたものである。このうち五首が草庵集にも見えるが、詠作機会は個々に異なり、また歌題についても111以外の四首が異なる。中条備前守主催の歌会の作は、草庵集では異なる場の作として記されることから、前稿では、それぞれに異なる場での出詠に転用され、そちらの形で草庵集に収められた、と考えておいた。112の歌題「寄風恋」は、草庵集では御子左大納言（為定）家の百首での出詠歌とされ歌題は記されない。頓阿法師詠では主催者名は記さず四季題の百首歌として詠じたという詞書になっているが、これは四季と恋から成る百首のことを意味するのであろう。いずれにせよ、草庵集・頓阿法師詠とも、百首歌として詠じたことを示すものの恋の歌、特に風に寄せる恋の歌であったことは記していない。

89・141は日次家集では和歌本文に傍書がある。これらの傍書の表現はいずれも草庵集・頓阿法師詠では採用されていない。傍書については「二」に含まれる92・104とともに既に前稿で取り上げているので詳細は前稿に譲る。

尚、56・70は、特に取り上げるべき問題点が見出されない。

以上のように、この分類からは、123に加え48・66・74の三首も、頓阿の表現精選の過程が窺えるものであることを指摘しておきたい。

二

本節では、日次家集中草庵集とのみ共通する二三首を取り上げる。うち傍書のある92・104と表現精選と考えられる本文異同のある115については前稿に既述している。また11・36・57・100・105の各歌は、特に取り上げるべき問題点が見出されない。[3]

異同はあるものの字形類似による誤写の発生と考えられるのが7・39である。7は詞書によれば詠作機会は日次家集と草庵集で異なるものとなるが、このあたりは草庵集の伝本内にも配列混乱に伴う詞書の異同のあるところで注意を要する。[4] 歌意からは、結句「きゆる」は本来は「きゆる」ではなく「きこゆ」であったと考えられ、日次家集の転写上の誤記と推察されよう。[5] また39は「ひかり」→「ひかけ」の変化であり、有意の改変とは認められない。

和歌本文に有意の異同があるのが18である。詠作機会は日次家集と草庵集で異なるが、[6] 歌題には異同がない。日次家集では初句が「はれやらぬ」とあり、判読困難な一字を含む結句は「なきてゆくらん」であったとおぼしい。「晴れやらぬ」は「雪げ」と結びつくことの多い語で、歌題「雪中鶯」から、雪の降りつつある立春の今朝、鳴いて飛び去る鶯を詠じたものとなる。一方、初句を「消やらぬ」とする草庵集では、降り積もって消えない雪の中迎えた立春の朝を詠じつつ、そのような中でも鶯は春を告げるのであろう、と季の到来を述べる歌として相応しい内容となっている。草庵集諸本の中でも、例えば新編国歌大観底本である承応二年板本は日次家集と同じく「はれやらぬ」である。頓阿自身の改変であるかどうかは断定出来ないが、原初形態「はれやらぬ」から「消やらぬ」への本文変化が起こったものであろう。結句「ゆく」と「つく」の異同については、字形類似に起因する誤記ともとれるが、積極的に初句の異同発生に呼応して起こった本文異同かと考えたい。

詞書の異同に着目すると、この分類内でも多く存在する。58の歌題中の一字欠、99の歌題欠脱のような例もあるが、23・54・91・107・114のように、詠作の場と歌題の両方にわたって異同の見受けられるものがある。うち、54は同じ邦看親王の会とされるものの、三十首会と五首会の相違があり、歌合形式であったと考えられる【N】の場で詠じられた91は草庵集では「恋歌の中に」という詞書で見える。「一」で取り上げたように、【Q】の場で詠じられた107・111・114も別の場での作とされ、うち107・114は歌題も違う。

同じようにこの分類中の詞書を詠作の場ごとにみてみると【E】と【T】も日次家集と草庵集では記される詠作機会は異なる。【E】の「性阿上人坊の當座百首」からは十四首が日次家集27～40に収められているが、うち四首が草庵集に入集している。しかし、三首は詠作機会を記さ

ず35の歌題「賀茂」は草庵集では「神祇の歌中に」になっている。また【T】の「左大臣家續百首」の十首126～135からは128と130が草庵集に入集しているが、128歌題「藤」は草庵集では「松上藤」、130歌題「納涼」は草庵集では「夏雨」となっている。

以上、この分類のうち和歌表現の精選かと考え得る場合は、既述の115に加え、新たに18の一例があることを指摘した。

三

続草庵集とのみ共通するのは四首である。うち、122・149は取り上げるべき問題点がない。82・83は同機会の作で、83は歌題「池上藤」であったものが続草庵集では「(同じ心（藤花）を)」という詞書で入集している。

和歌表現の点で問題になるのは82のみである。四句の助詞と結句に異同があり、日次家集の「春風そふく」という表現から思い浮かぶ穏やかな春景色は、続草庵集の「あらし吹なり」という表現により散り敷いた花弁が風に舞い上がる景に変えられている。

「あらしふくなり」という表現を伴なう落花の景は、御室五十首の家隆歌

五五五たびねするゆめの中にも落花のさむる枕にあらしふくなり

のような夢幻的な雰囲気を漂わせる耽美的な表現である。一方、「春風そふく」は草庵集にも入る新千載集雑上の

民部卿為藤やよひの比東山の庵室に尋ねまかりて花見侍りて後、山ざとの梢はいかがなりぬらん都の花は春風ぞふく、と申しつかはして侍りける返事に　　頓阿法師

一七一八山里はとはれし庭も跡たえてちりしく花に春風ぞ吹く

でも用いられている、現実的な表現である。人の訪れの絶えた山里の庭の落花の景を詠む一七一八は為藤生存時のやりとりであることから、当該歌よりも先行する作となるが、「春風そふく」が実景から想起される表現であることを示していよう。

尚、新編国歌大観が底本とする承応二年板本では歌題が「落花」であり、続草庵集諸本内で本文の揺れがあるが、和歌表現の異同の発生とは直接結びつかないものと考えてよいだろう。

おわりに

ここまで、共通歌一覧を元に、煩瑣な検討を重ねてきた。共通歌のうち頓阿自身による表現精選、歌句改変かと積極的に判断される場合は七例であった。この数は日次家集全一六七首に比して、少ないようにも思える。しかし、頓阿の詠作史において、これまで明確に論述することが出来なかった改作過程が窺えるという点では、貴重であろう。現在の草庵集・続草庵集の歌のすべてが詠作時点のままの表現で所収されているのではないということになる。但し、この七例の詞書を見ると、日次家集と頓阿法師詠・草庵集との間に相違のあるものが含まれていることがわかる。改作が、頓阿法師詠・草庵集の編纂に際して行われたものか、他の詠作機会の出詠歌として転用する際に行われたものかは判然としない。この点に関わって、問題となるのは、同じ歌が異なる詞書で日次家集と草庵集の双方に見えることがままある、という事実であろう。これ

は和歌表現の精選とは位相の異なる問題であるが、詞書の違いを検討することは草庵集編纂姿勢と関わって重要な視点となる。従来、我々は草庵集の詞書を《事実》として読解してきたわけであるが、中には、意図的に、或いは、はからずも、本来の詠作機会や歌題を正しく記していないものが含まれているのかもしれない、ということを、今後は心の片隅に置くべきではないだろうか。

稲田氏の研究であきらかなように、草庵集の本文異同は複雑で多岐にわたる。そして草庵集には諸本に加え、近世の草庵集注釈書類が使用している本文も存在する。それらをも加えると研究対象とする本文は拡がるばかりである。このような現状にあって、詠作時点により近い日次家集本文を基にして和歌表現の段階的な精選の実例を示そうと試みた本稿が、今後の頓阿研究の糸口になれば幸いである。

注

（1）稲田利徳『和歌四天王の研究』（笠間書院　一九九九年）二八四頁。以下、本稿における稲田氏の説はすべて同書による。

（2）和歌文学大系草庵集脚注は次の古今集（雑上）歌を本歌として記すが、直接的には基家歌に依拠していると見るべきであろう。

題しらず　　よみ人しらず

九〇四ちはやぶる宇治の橋姫なれをしぞあはれと思ふ年のへぬれば

（3）但し、36・57は草庵集諸本内での異同がある。

（4）この部分の草庵集の配列は

等持院贈左大臣家二首、雪中鶯

一〇ふる雪の朝の原にきこゆなり春をたとらぬうくひすの声

おなし心を

一一消やらぬ雪には春もしらしとや今朝うくひすの鳴てつくらん

梶井宮二品法親王家にて、鶯

一二春はまつ匂はぬ花にさそはれて猶ふる雪に鶯そなく

となっており、稲田氏により諸本間の詞書・和歌本文の配列異同も指摘されている。日次家集18の詞書は草庵集一二の詞書と類似しており、本来は草庵集一一にあったものが一二に動いたとも考えられ、単純な誤写や頓阿の編纂上の操作等だけでは論じきれない問題を孕んでいる。

（5）前稿注（15）参照。

（6）前出注（4）参照。

付記

本稿は和歌文学会第一〇八回関西例会における口頭発表に基づく。席上、ご教示をいただいた諸氏に深謝申し上げます。また本資料閲覧以来、継続してご高配、ご教示をくださいました公益財団法人陽明文庫名和修文庫長に御礼申し上げます。

（原稿受理日　二〇一二年九月二七日）